

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 24 日現在

機関番号：12501

研究種目：基盤研究 (C)

研究期間：2010 ～ 2012

課題番号：22520420

研究課題名（和文） ミエン語文法の記述言語学的・歴史言語学的研究

研究課題名（英文） A descriptive and historical study of the Mienic languages

研究代表者

田口善久 (TAGUCHI YOSHIHISA)

千葉大学・文学部・准教授

研究者番号：10291303

研究成果の概要（和文）：

本研究は、ミエン語系の従来記述が進んでいない言語について、記述を進めるとともに、言語間比較を通してミエン語文法の過去の姿を究明しようとするものである。前者の目的については、海外研究協力者の協力と申請者の調査によって、ビャウミン語、チャウコンメン語のデータを新たに入手することができた。このデータに基づいて、Haspelmath, et. al. (2005) The World Atlas of Language Structures の項目について、多くの項目を充填記載することができた。さらに、後者の目的については、これらのデータに基づいて、いくつかの文法項目について比較研究を行った。人称詞体系の構造、極性疑問の形成法、否定の形態素のステータス、場所表現について考察を行った。その結果、ミエン語の諸言語・方言間の文法的差異のいくつかを解明することができた。

研究成果の概要（英文）：

The aim of this study is to make contribution to the study of some underdescribed Mienic languages and dialects. It also tried to elucidate some historical aspects of the Mienic grammar. The author was successful in obtaining the data of Caukongmeing, which is an understudied Mienic language spoken in Guangxi, China, and also collecting some valuable data of Biaomin through collaboration with a researcher in China. Based on the analysis of these data, the author was also successful in describing the grammar items of these languages in a typological framework (Haspelmath, et. al. (2005), The World Atlas of Language Structures). Concerning to the historical study, the author conducted comparative work on some grammatical topics: the structure of personal pronoun, the formation of polar question, the status of negative morpheme, and the formation of locative expression.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010 年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2011 年度	800,000	240,000	1,040,000
2012 年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総計	2,700,000	810,000	3,510,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・言語学

キーワード：歴史言語学・記述言語学・ミャオ・ヤオ・ヤオ族・文法比較

1. 研究開始当初の背景

ミエン語は、東アジアから東南アジアにかけて分布するミャオ・ヤオ諸語に属する1つの言語である。先行研究によれば、イウミエン（優勉）方言、キンムン（金門）方言、ザウミン（藻敏）方言、ビャウミン（標敏）方言、チャウコンメン（交公勉）方言に分けられている。

以上にあげたミエン語の諸方言（及び他の変種）の間は、互いに意思の疎通が不可能なほど距離が離れており、それぞれを独立の言語と見なしてもよいのであるが、その文法については、イウミエンを除いて、従来十分な研究がなされてこなかった。その理由としては、文法に関する調査の不足、漢語（中国語）文法とほぼ同じであるという憶測、をあげることができる。そこで、文法面の記述を進める必要があった。

2. 研究の目的

申請者はこれまでの記述研究の成果を利用し、さらに補充の調査を行うことによって、(A)従来不明であったミエン語の諸方言を相互の異同に注意を向けながら、記述し、整理してデータ集をつくること、(B)そのデータ集をもとに文法、とりわけ統語論についての歴史比較を行うという2点を、本研究の目的とした。

3. 研究の方法

以下のような手順で研究を進展させるように努めた。

(1)申請者の保有するデータを主要な分析の対象とするが、データの補充のため海外（中国）の共同研究者を依頼した。また、現地で補充調査を行った。これにより、各方言についての必要な情報を確保した(22, 23年度)。

(2)文法項目ごとに、方言の特徴を整理して対照できるようにデータベースソフトに入力した(23年度, 24年度)。

(3)選択した文法項目について、祖語の文法について歴史的研究を行った(23, 24年度)。

(4)海外共同研究者と文法問題、歴史研究について討論を行った(23, 24年度)。

4. 研究成果

(1)新たなデータの入手

申請者は、従来記述されてこなかったミエン語方言（ミエン語系言語）のデータを調査によって入手した。それは、中国広西チワン族自治区恭城県三江郷においてのみ話者が確認されているチャウコンメン（Cao Kong Meing）のデータである。チャウコンメンについては、語彙のデータ収集して音韻分析も行った。さらに、海外研究協力者の鄧方貴氏（中央民族大学）と共同研究を行い、鄧氏からビャウミン語のデータを補充していただいた。

(2)データの文法項目による整理

新たに入手したデータ、申請者がこれまで記述してきたミエン語系諸言語の文法に関するデータ、および海外共同研究者から新たに提供を受けたデータを、文法項目ごとの記述の枠組みへ整理する作業を行った。個別の文法項目については、類型論的な枠組みである、Haspelmath, et. al. (2005) *The World Atlas of Language Structures*の項目を使用して、データベースを作成した。これにより、従来多くの項目が記載されないままであった*The World Atlas of Language Structures*のミエン語の項目の多くを記載することができた。また、従来、ミエン語はイウミエンのみがミエン語の代表としてあがっているが、そのデ

一タとは異なる特徴を少なからず見出すことができた。

例として、Haspelmath, et. al. (2005)の項目番号92「極性疑問助詞の位置」をみると、イウミエンが「文末に助詞を置く」となっている。ところが、ビャウミンでは、A-not-A形式および動詞の形態変化を使用し、チャウコンメンでは助詞は動詞の直前に位置する。この現象は、ミエン語の極性疑問助詞の位置をイウミエンのデータで一般化できないこと、さらにはHaspelmath, et. al. (2005)のパラメータの立て方に問題があること（これらの三者を有効に区別できないこと）を示している。

(3) 文法の歴史比較

文法項目における比較において、とりわけ目立った変異について、初歩的な考察を行った。例として、人称詞(Haspelmath, et. al. (2005)の項目番号 35) についてみると、イウミエンは<人称語幹+名詞の複数接辞>というタイプであるが、ビャウミンは<(人称+数)の語幹>というタイプであり、チャウコンメンも同様である（ただし、3人称はイウミエンと同じタイプ）。さらに、同系言語のミャオ語 Hmong のデータも、後者と同様である（他のミャオ語系言語である、Hmyo と Pana はいずれも<(人称+数)の語幹+名詞の複数接辞>という形式であるが、<(人称+数)の語幹>からの派生とみなすことができよう）。ここから見て、ミエン語も現在のイウミエンとは異なり、かつては<(人称+数)の語幹>というタイプであった可能性が高いと考えられる。

別の例として、極性疑問助詞の位置(Haspelmath, et. al. (2005)の項目番号 92) をみると、先に触れた3つの構文の中で、文末助詞と A-not-A は中国に広く分布する極性疑問形式であり、とりわけ漢語に見られるので、漢語からの影響を排除できない。一方、

チャウコンメンに見られる<極性疑問助詞+動詞>は、同系のミャオ語 Hmong に同じ形式が存在する。これらは地理的には隔絶している点が興味深い点である。漢語にも同様の形式はあるが、地理的に断絶しているので、この形式が祖形の可能性がある。

今回申請者が収集整理しえたデータは、ビャウミンを除いては、いまだ不完全な部分があり、さらなる調査を行う必要がある。したがって、歴史比較については初歩的な研究の段階にあり、さらなる研究が必要であることは言うまでもない。主要な研究の成果については、チャウコンメンの調査報告書を出版予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 1 件)

- ① 田口 善久, 恭城県三江郷ミエン語 (チャウコンメン) 調査報告, 『ユーラシア言語文化論集』, 査読無, 12, 2010, 71-82.

[学会発表] (計 2 件)

- ① Yoshihisa Taguchi, Cao Kong Meng – Another Clue to the Proto-Mienic, 20th meeting of the Southeast Asian Linguistics Society, 2010/6/10, University of Zurich, Switzerland
- ② 田口 善久, ミエン語系諸語の系統と分類について, 日本歴史言語学会第一回大会, 2011年12月18日, 大阪大学豊中キャンパス.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

田口 善久 (TAGUCHI YOSHIHISA)

千葉大学・文学部・准教授

研究者番号：10291303

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：